

# 国府遺跡発掘と道明寺天満宮

南坊城 光 興

筆者の奉仕する道明寺天満宮で、先日未公表の資料が発見された。一昨年頃より、所蔵する文書や本を整理していた中での発見であった。それは「国府遺跡発掘一覧表」(以下「一覧表」)である。発見の一週間後に、別件で高橋隆博館長にお会いする機会があり、この資料を実見してもらったところ、「南坊城家と国府遺跡の関係を記した興味深い資料である」との評価を頂いたので、紙面を借りて紹介したい。私事が多くなるとは思うが、発掘当時の伝え聞く逸話やその発掘調査を知る貴重な資料であるのでお許しいただきたい。

国府遺跡は現在の大阪府藤井寺市惣社に位置し、明治20年代に学界にその存在を知られ、大正6年から10年にかけて10次にわたる発掘調査、戦後に再発掘調査が行われ、日本の旧石器文化研究史のなかでも特異な位置を占める遺跡として現在は国の史跡に指定されている。また近年は藤井寺市教育委員会も周辺地の発掘調査を実施している。大正年間出土品は京都大学、大阪医科大学、道明寺天満宮に一部が寄贈されたが、多くは発掘のスポンサーで、当地の発掘権を買収した大阪毎日新聞社主本山彦一氏の収蔵するところとなった。氏の収蔵品の大部分は現在関西大学博物館に収蔵される本山コレクションとなり、国府遺跡出土の玦状耳飾や縄文土器などが国指定重要文化財に指定されている。このように関西大学と国府遺跡の深い関係も本

稿執筆の一因ともなっている。

本稿で紹介したいのは大正年間の発掘調査についてである。因みに道明寺天満宮収蔵品は、その一部を『関西大学博物館紀要』第10号に海邊博史氏らが「藤井寺市道明寺天満宮所蔵考古資料について(1)」として紹介されているのでご参照されたい。

まず「一覧表」は字体から考え、筆者の曾祖父南坊城良興によって書かれたものと考えられる。「一覧表」にはもう一枚文書が添付されている。ただし、二枚目は走り書きであり、それを清書したものが一枚目である。内容はほぼ同じである。全10次の発掘であるが、そのうちの9次が記されている。発掘者にはその時の発掘隊の責任者を記し、発掘地や発掘品、発掘時期・期間も記されている。さらに「一覧表」には「備考」として「本表ハ見聞ノ概要ニ付詳細ハ其発掘者ニ就テ問合サルベシ」とあることから発掘の見学についての記録と見間違えるかもしれない。しかし後述するように良興が発掘に携わっていたことから、実際の記録と考えられる。発掘時期が前後すること、日数が正確でないことなどから、発掘時に書き綴ったものではなく、発掘後に思い起こすように記録したのではないかと推測される。

著者の良興は慶応元年に高倉永祐の次男として生まれ、明治5年道明寺天満宮と道明寺の神仏分界に際し、尼より還俗し南坊城家を興した



道明寺天満宮蔵 玦状耳飾



国府遺跡発掘一覧表

梓子の養嗣子として南坊城家に入った。良興は泊園書院（関西大学図書館にある泊園文庫はこの泊園書院の蔵書本を寄贈されたものである）に学び、第3代官司（当時は杜司）として道明寺天満宮の発展に寄与したことはいうまでもない。良興が考古学について学んだことは聞いていないが、多くの考古関係の蔵書を確認できる。発掘以前に濱田耕作氏や本山氏との関係ははっきりとはわからない。

発掘時のことを伝え聞くとところによると、発掘隊は道明寺天満宮内にある良興邸に宿泊していた。国府遺跡から良興邸まで徒歩で約10分くらいであること、当時には周辺に宿泊施設がなかったことなどから記される全ての発掘に宿泊していたのではないかと推測される。道明寺天満宮では当時の記録を他に見出されていないが、大正8年4月の調査の時、発掘隊に加わった東大在学中の川村真一氏の回想録がある。「特に本山先生の御厚意によって、その発掘隊の宿舎たる道明寺天満宮の南坊城良興氏方に宿泊した。」（『松陰本山彦一翁』）とある。

当時の大阪毎日新聞を見ると発掘時の様子が詳細な記事として掲載されている。大正6年6月、第1次の発掘には京都帝国大学濱田耕作助教授（当時）の指導により発掘が進められ、人骨など多くが出土した。紙面上に濱田氏はその成果とともに「本山彦一君、南坊城君等にも御礼を申述べて置く。」と文章を寄せている（6月10日付）。

第2次発掘では、調査地には大勢の見物者が押し寄せたようで、贗造石器が売買されていたことが良興の証言として載せられている。また発掘には本山彦一氏の後援により「鳥居（龍蔵）、福原（潜次郎）、田澤（金吾）、南坊城氏息良修の四氏」が携わったことが記され（8月16日付）、翌17日付には「鳥居氏を主として田澤、南坊城良修の両君」が国府の遺跡を発掘し、富田林の喜志遺跡を「南坊城良興氏を主として次男良昂（卓）君」らが発掘調査したとある。

これら調査時の大正6年には長男良修は24才、次男良卓は16才であった。余談ではあるが、喜志遺跡は筆者の祖父良卓が発見した遺物を契機に調査されたと聞いている。さらに翌18日付には、本山邸で「収集品の大整理」をしたことと、これには良修が参加したことも併せて記さ

れている。また現八尾市の恩智の遺跡についても良興が案内したことも記され、他の場所の発掘も同時に行われていたことがわかる。この後の発掘についても良興らの参加が窺える。つまり良興親子は宿泊場所の提供だけでなく、発掘調査にも携わっていたことが明らかである。物心両面の協力に対して本山彦一氏は玦状耳飾一對を含む国府遺跡出土品の一部を、御礼の意味も込めて道明寺天満宮に寄贈した（『前掲書』）のである。

また発掘期間中には少なくとも二度、人骨の法要が行われていることがわかる。大正6年10月10日と大正7年5月4日のいずれにも道明寺の六條照傳尼が比丘尼二、三人を供して読経供養を行い、良興を始め発掘に携わった人々が参列したことも併せて記される。

ところで、平成16年に中国陝西省西安の西北大学で公表された井真成の墓誌についてご記憶の方も多いと思う。この井真成には井上姓と葛井姓の二説があるが、井上姓を採ると、国府遺跡上にあったとされる衣縫廢寺を中心とした氏族であったとする説がある。21世紀に入り国府遺跡が再び脚光を浴びようとしているのである。

最後に発掘隊が良興邸に宿泊中の逸話がひとつ伝わっているので紹介しておきたい。牛が天神さま、すなわち天満宮のご祭神菅原道真公のお遣いとされていることから、南坊城家では境内で牛肉を食べないのだが、境内にある良興邸に宿泊していた発掘隊はすきやきを食べたそうである。その時に良興が大変叱責したことはいうまでもない。



法要の様子。尼僧の間から見える帽子を被っているのが良興。